

二次元ぶち文庫

ROLLER FIGHTER RANKA

ローラーファイター
蘭花 ランカ



山本沙姫
表紙イラスト:トイト

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『ローラーファイター蘭花』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



ローラーファイター
蘭花 ランカ

山本沙姫
表紙 / トイト

登場人物紹介

Characters

みさきらんか

美咲蘭花

ローラーファイトの女子リーグ「アルテミス」で快進撃を続ける、アイドル的な人気を誇るスター。

みさきまなみ

美咲真奈美

蘭花の妹で、大学に通っている姉想いの少女。

くすのきけんさく

楠木健作

非合法のローラーファイトを行う闇リーグ「ダークタイタン」の興行主。

ローラーファイターと呼ばれる闘士たちが、一周二〇〇メートルのオーバルコースで激突する地上最速の格闘技。

その名は、ローラーファイト。

時速三〇キロオーバーの猛スピードを叩き出すローラースケートで滑走しながらのバトルは、多くの格闘技ファンを魅了してやまない。

毎月三回開催される興行は、男子女子どちらの試合も常に満席。さらにテレビやインターネットで生中継され、数十万人の視聴者を釘付けにしている。

そしてこの日、女子リーグ「アルテミス」において、全国のファンが注目する大一番がおこなわれていた。

ガガッ！ ガーッ、ガガッ、ガーッ……。

（あと二分。でも、このままじゃ……勝てない……）

木製の路面を蹴る硬い衝撃音を響かせて、一人の美女がトラックを走る。背中まで届くほどの、長い黒髪のポニーテールを靡かせながら。

（……なんとかして、もつとポイントを稼がないと……）

十分間のバトルの勝敗は、基本的に一周ごとに一〇点入る周回ポイントと、相手への攻撃を成功させると得られる、一〇〇から一〇〇〇点のアタックポイントの合計で決まる。

現在の得点は一三〇〇対一〇〇〇。残りわずかな時間で、三〇〇点の差を覆すのは難しい。「はあっはあっはあっはあっ……」

荒い息をつき、額に汗滲ませて走る美貌の闘士の、紅潮した柔らかな頬に焦りの色が滲み出る。

策を練りつつ、五メートルほど先を行く対戦相手を狙う追跡者。その風貌は、低めの可愛らしい鼻にふつくらとした顔の輪郭が優しげな印象。

多くの格闘家を持つ、力強い雰囲気からはほど遠い。

(「だけど、どうすれば……」)

スカイブルーの生地に、不死鳥の羽ばたきをイメージしたファイヤーパターンの刺繍を胸元にあしらったレオタードを纏った体躯は、身長一七〇センチほど。

背丈だけなら、ローラーファイターとしては小柄なほうだが、身体全体からはあまり小さい印象を感じさせない。

「はっはっ、はうっ……くっ……」

何しろ、細い両手の振りにあわせてプルンプルンと弾むDカップのバストは、九〇センチ近くもあるのだから。

それでいて自重で歪む事もなく、美しい球形を保っている。

胸元の薄い布地に、微かに二つの突起を浮き立たせて波打つ姿は、今にもコスチューム

を引き裂いて飛び出してしまひそうで、非常に危なっかしい。

ガーツガーツガーツ……。

ムチムチと張りのある太腿を大きく開き、一步踏み出すごとに左右に揺れるヒップ。縦一文字に走る肉の溝に尻布をキリキリと食い込ませるそれは、乳房と同等に九〇センチオーダーとかなり大きめ。

しかし弛みなく、左右均等にゆるやか曲線を描いて張り出した姿が美しく、まるで熟れた桃の実のよう。

さらに、レオタードの下からわずかに顔を覗かせる尻肉の表皮が、激しい動きがもたらす発熱でほんのりと朱に染まり、乙女の肉体が放つ色香をさらに引き立たせる。

可愛らしさと艶かしさ併せ持つ、セクシーなコスチュームを纏った華麗な格闘家。ローラーファイトを知らない人が見れば、グラビアアイドルか何かと誤解されるかもしれない。(せっかくのチャンスなのに、このまま負けて、たまるか……)

だが、宿敵の広い背中をしっかりと見据える黒い瞳は、目尻がキツと吊り上がり優しげな面持ちに不釣り合いなほどキラキラと輝いている。

勝利を掴みたいという、飽くなき欲望に。

(とにかく、まずは距離をもつと詰めない……)

ガッ！ ガガガ———— ツツツ！

走りに勢いをつけるべく、スピードスケートの要領で前屈みになって、両腕を上下に大きく振りつつ路面を強く蹴る。床面に向けて垂れ下がった乳房を、さらに激しく揺らして。

「おおっ！ 仕掛けるぞ！」

「よーしっ、いつけえええーつつっ！」

観客の声援を浴びつつ、激走する彼女の名は美咲蘭花。フェニックス蘭花のリングネームで活躍するローラーファイターである。

見た目の可愛らしさに加え、デビュー二年目の若手ながら、二シーズン続けて三位入賞という実力も持ち合わせており、その人気はきわめて高い。

そして今、彼女は初めて第二位にランクアップできる絶好の機会を迎えていた。

「おーっと！ 残り一分でフェニックス蘭花飛び出したーっ！ ここで逆転なるかーっ!!」

ドーム状のスタジアムの天井につけられたスピーカーから、実況アナの絶叫が響く。すると釣られるように、先を走る対戦相手が振り向いてきた。

「へっ、まーだやる気かい？ 往生際が悪いねえ〜」

頬に不気味なドクロマークを描いた、茶色い短髪の大女が不敵な笑みを浮かべて呼びかける。

現在、アルテミスで第二位の彼女の名はライノ北崎。反則ストレスレのラフプレーをバト

ルスタイルの信条にしている、いわゆるヒール（悪役）のファイターだ。

しかし、一〇〇キロオーバーの巨体と、鈍重そうな太い見た目に反した素早さを活かした豪快な戦いぶりに、惹きつけられるファンも多い。

「ライノーっ！ 必殺技で返り討ちにしてやれーっ！」

彼女にも、蘭花に負けないほどの声援が飛ぶ。

（じっ、冗談じゃない。これ以上あんなの、食らったら……）

ライバルへの応援に、思わず動きが鈍る。

何しろライノの決め技は、軽く五〇キロ以上勝る全体重を乗せての体当たり。一見単調そうな攻撃だがそのスピードはあまりに速く、デビュー以来今まで一度も破った事はない。

いわば、二位へのランクアップを阻む動く壁だ。

今日もすでに何度か食らっており、全身に受けたダメージはまだ残っている。

ガーッ！ ガガガガ……。

（こっちから仕掛けても、また弾かれる……）

足がすくみ、徐々にスピードが落ちて、再び距離が開いていく。

「はははっ、蘭花びびってるぜ」

「そりゃーそうだろ、今まで一度も勝った事ねーもんなー」

（くっ……）

ライノのファンから飛ぶ野次の嵐に、思わず唇を噛み締める。

「そりゃーそうよ、いつもまともにもぶつかっていくからなあ。お嬢ちゃんはよ〜」
(まともにもぶつかっていく? ! そ、そうだ!)

しかし、耳に突き刺さる野太い声が、彼女の脳裏に起死回生のヒントを閃かせた。

「たあつ!」

ガシッ! ガガーガーガー……。

気合と共に路面を強く蹴り、一気にスピードを上げて宿敵に迫る。

「くっ! 生意気な。返り討ちにして、やる……?」

しかし蘭花は、攻撃を仕掛けるどころか大きく迂回して、目の前の宿敵をあつさり追いつき去った。

「あんたのファンのおかげで気づいたわ。まともにもやりあうだけがバトルじゃないってね」
あつけに取られる巨漢に向かって、蘭花は口元をニヤリと歪めて憎まれ口を叩く。

「なんと! この局面でライノをスルー。まさか残り一分弱で、三周抜きを仕掛けるつもりか!?!」

彼女の胸の内を代弁するかのようには、実況アナが会場内の空気を絶叫で震わせた。

ローラーファイトで得られる得点には、周回と攻撃以外にもいくつかボーナスポイントとでも呼ぶべきものがある。

彼の言う三周抜きとは、文字通り対戦相手を三回追い抜く事で、成功すれば今まで獲得した周囲ポイントが三倍になるというもの。

力や体格の差だけで勝敗が決まらないようにする配慮であり、こうしたいわゆる駆け引きも、観客の楽しみの一つになっている。

「三周……ふっ、ふざけるなあっ！」

ガンッ！ ガンガガンガンッ！

トラックを蹴破りそうな勢いで、一〇〇キロ超えの大女が足を踏み込み加速する。

何しろ、パワーだけでなくスピードにも自信があるだけに、今まで一度も勝てなかったような若手が三回も追い抜こうなどは、プライドが許さない。

ましてや、試合時間残りわずかなタイミングで挑んでくるのだからなおさらだ。

ガガガガンッッッ！

けたたましい走行音を響かせて、蘭花を猛追するライノ。その姿は纏っているレオタードの色もあいまって、まるで黒い砲弾のよう。

「ふっ、そんな調子じゃわたしに追いつく事すらできないわよっ！」

しかし体重が軽い分、スピードに関しては蘭花のほうが上手。みるみるうちに、背後を行く宿敵と距離を開いていく。

「なにいつ！ てめえ、このままじゃすまさねーぞ！」

「いーくぞおっ！」

「はいっ、それっ！」

ズリユツ！ズリユツズリユツ……。

乙女のクレヴァスを抉ったままで、大男たちの綱引きがはじまってしまった。

荒々しい掛け声と共に、女唇の上をザラザラした荒い目の縄が行き来し、不気味な摩擦音を上げる。

「ひぎいっ！ あっ、あうっ！ ひいっ！ やっ、やめろおっ！」

さすがに屈強な女格闘家でも、筋骨隆々とした男二人がかりで攻められては手の打ちようがない。

しなやかな手で掴んだ荒縄は、いくら力を込めて止めようとしても、易々と引っ張られてしまう。

ズジュツジシユツジユツジュツ！

「ああっ、ひっ、卑怯な……ああっ！」

薄手のショーツを難なく擦り切るロープは、乙女の秘園の中にまで無遠慮に入り込んでいく。

女体の最も敏感な部位に、火傷しそうなほどの高熱と激しい痺れを刻みながら。

（なっ、なんとかして、抜け出さないと……）



表面を毛羽立たせたロープは、粗い縄目で柔らかな肉花を容赦なく引つ掻き回す。

紅色の花弁を押し開き、奥底でひっそりと佇む真珠のような肉蕾を引きずり出し、その表面をゴリゴリと擦られるたびに、下腹部一帯を激しい電撃が走る。

「ひっ、ひぎいっ！ あうんっ！」

ズリッジシユッジシユッ！

ブルンッ！ ブルンブルンッ！

股間から間欠泉の如く湧き上がる衝撃が、背筋を駆け抜けけると自然と身体が反応してしまふ。

顎を上げ、背中を反らして全身が跳ね上がり、湿ったタンクトップを引き裂きそうな勢いで砲乳が揺れ動く。

（こんなの、続けられたら……わたし……）

最も敏感な部位を締めつける、激しい痛み。その陰から徐々に、危険な感覚が顔を覗かせ始める。

肉体の奥底を、優しく撫で回される心地よさが……。

（だ、だめっ！ 飲まれちゃ……こいつら、敵なのよっ！）

長い髪を振り乱し、脳髓を桃色に染める甘美な刺激を懸命に振り払おうとする美貌の闘士。しかし懸命な努力も空しく、身と心の疼きが抑えられない。

シュツシュツ……ヌチャツ、ミチュツ……。

やがて股間が奏でる摩擦音が、徐々に粘り気を帯びてきた。

「ヒイツ！　う、ウソよ……こんな……あうっ!!」

薄紅色の肉の花園の奥底から、透明な淫蜜が溢れ出て、火照って朱に染まった太腿の上を垂れ落ちる。男臭いスタジアムに、甘酸っぱい乙女の香りを振り撒きながら。

「おおーっと！　イエローマッスルとブラックの見事な股縄攻撃に、さすがのフェニックス蘭花も感じたかあっ！」

粘液にまみれて、妖しくヌラヌラと輝く乙女の丘が場内スクリーンに映し出されると、羞恥心をより掻き立てるかのように絶叫が場内に響く。

「！　くうっ、こ、こんな事で……負けて、たまるか……」

神経を逆撫でするやかましい実況に、ハッと我に返った蘭花は、眉間に皺を寄せた険しい顔でなおも懸命に戦い続けようとする。

しかし、膣内に無理やり打ち込まれる苦痛と快感の銃弾は、容赦なく彼女を責め立てた。ジュンツ、ジュンツ、ジョルツジリュツ……。

「ううっ、ああっつ……」

陰肉を溶かしそうなほどの摩擦熱が股間を多い、ジワジワと全身に向かって広がっていく。

「へえー、頑張るねえ」

「だけど、どこまでその強気もつかない」

捕らわれの女戦士をさらに辱めるべく、ブラックとイエローはますます早く縄を引き始める。

ジュシユツ、ネチユツミチヨツミジュールツ……。

さらに引くだけでなく、腕を上下に振って、肉割れの中へより強くロープを食い込ませた。
「うあうっ！ あっ、ああつつつ……」

時折両足が宙に浮くほど掲げられる蘭花のヴァギナの中を、凄まじい電撃が駆け抜け、膀胱をブルブルと震わせていく。

（だめ……このままじゃ……）

膝を固く閉ざし、必死に尿意を堪えるものの、肉体は本人の意思を無視し、大衆の面前での粗相を強要していく。

下腹部の中を駆け巡る、静電気に似た痺れが止まらない。

「そろそろいいかなー」

「よーし、やるぞブラック。せーのっ！」

するといきなり、二人の筋肉男は息を合わせて縄を天井へ向けて大きく振り上げた。

「えっ！ ひっひやあああつつつ！」

ブオンッ！

ピシュッ！ プシャアアアア……。

突然の衝撃に耐えきれず、蘭花はむき出しの秘唇から黄金色の雫を撒き散らしながら宙に舞う。弓なりに身体を反らし、股間を大きく突き出して。

「なんとおっ！ ここで蘭花選手まさかの空中大開帳ーっ！ これはすごいぞおっ！」

左右に広がった秘唇から紅色に充血した肉襞がはみ出し、噴き出した体液にまみれてキラキラと鮮やかに輝いた。

バダンッ！

「ひぐうっ、あつ、ああ……」

そのまま受身も取れず、放り出された操り人形のようにコースに落下した彼女の潤んだ瞳に、巨大スクリーンの画像が飛び込んでくる。

何度も繰り返し、時には大映しにされる、愛する人にしか見せられない乙女の最も大切な部位が。

「いやーいいモノ見せてもらったねえ」

「これなら賭けに負けても、十分元が取れるな」

醜い欲望を滾らせた、観客たちの歪んだ歓声が耳に纏わりついてくる。

（わたし、こんな大勢の前で……）

繰り返し映される空中での放尿姿に、興奮し、騒ぎ出す群集を目の当たりにて、恥ずかしさのあまり心か砕けていく。

「おーっと！ フェニックス蘭花ついにダウン！ マッスルボーイズに一〇〇〇ポイント追加だーっ！」

シヨックで身動き取れず、ぼやける耳にリングアナの嬉々とした絶叫が木霊する。

(……せ、一〇〇〇点……そんな……えっ！)

ガチャッ！

一気に半分以上差を詰められ、呆然とする美貌のファイターに、さらなる惨劇が襲いかかった。

「おっと、これで終わったと思うなよ」

イエローマッスルに強引に後ろ手に手錠をかけられ、足腰立たない身体を引き上げられる。

「なっ、何をする……」

「そうそう、この程度で終わっちゃ、お客さんたち納得しないぜ……」

さらにブラックが背後から抱きつき、太腿を押さえて高々と抱え上げた。

「はっ、放せ……放せえっ！」

悲痛な叫びも空しく、蘭花は両足をM字型に大きく広げられ、まるでフィギュアスケー

トのリフティングのように、クルクルと振り回される。

「おおーっ、いいねえー」

「ブラッケー！ もつとこっちに近づけよー」

抗う事もできぬまま晒された、股縄の摩擦熱で真っ赤に染まった秘唇に、針のような視線が次々と突き刺さった。

（こ、こんなの……こんなのって……）

屈辱のあまりヒクヒクと痙攣する柔らかな頬を、大粒の涙がいくつも零れ落ちていく。

「おいおい相棒、お遊びはそのへんにしようぜ」

恥ずかしさと遠心力で朦朧としてくる彼女の前に、イエローマッスルが下品なニヤケ顔を晒しつつ近づいてくる。

「これ以上、何をしようって言うのよっ！」

憎々しい態度の悪党に向かって、捕らわれの女闘士は喉に目いっぱい力を込めて金切り声を上げた。

「そう慌てなさんなって。まずは……もうこんなものはいらんよなあ」

黄色パンツの筋肉男は、太い指をポキポキ鳴らしながら呼びかけると、両手を突き出して襲いかかってきた。

汗ですっかり透けてしまった布越しの胸を握り締める。

「さっ、触るな……あうっ！」

「ぬうおんっ！」

ビリッ、ビリビリビリイッ！

乳房を締めつける痛みに顔を歪めた瞬間、気合と共にタンクトップが引き裂かれた。

「いつ、いやあああ——つつつつ！」

しつとりと濡れた桃色の柔肌が、上向きの乳首を上下に振りつつ飛び出す姿が、大スクリーンに映し出された。

「いよっ！ 待ってましたあっ！」

「でけーおっぱい。しゃぶりたいねえ〜」

すでに賭けは二の次になっている、肉欲を滾らせた観衆はますますヒートアップ。誰もが皆、大スクリーンの中で波打つ巨乳から目が離せない。

中には手の届かない女体をおかずに、落ち着かない己が分身を宥める不埒者も。

「んーん、いいねえ。どれ、たっぷりと楽しませてもらうか」

鼻先が、ツンと上向きに尖った薄紅色の乳首に触れるほど顔を胸元に近づけながら、イエローマッスルが下品な口調で囁きかける。

「だっ、黙れ……ひいつ、痛……」

グニユウッ！

皮肉っぽい口調で呼びかけつつ、ブラックは腰をゆっくりとグラインドさせて、己が一物をさらに深く捻じ込んでくる。

燃え滾る肉欲の塊が、乙女の肉体を内側から焼け焦がす。

「だっ、だめえっ！ そんなの……お尻……壊れる……んああっつつっ！」

直腸の中で醜悪なケダモノが暴れ、勇ましい美人戦士の闘志を打ち壊していく。人として最も恥ずかしい部位を見られ、汚されていく屈辱感を織り交せて。

「きたー！ ブラックマツスルのアナル挿入！ これで一〇〇〇ポイントゲットだあっ！」

双曲の谷間に、ビリビリと駆け巡る激痛に苦しむ美人ファイターを、実況アナの言葉の銃弾がさらに痛めつける。

「そんな、また一〇〇〇点だなんて……こ、このままじゃ……あっ！」

ますます点差が縮まり、焦る蘭花は菊門の周りにチクチクとこそばゆさを感じ取る。

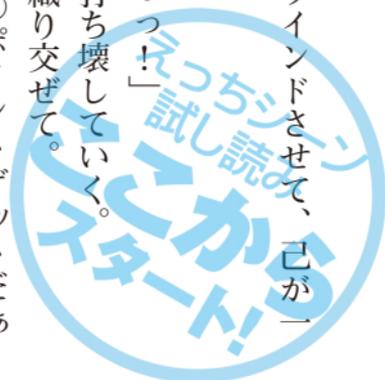
長い肉槍のすべてが入り込み、根元を覆う縮れた剛毛が、尻の谷間を遠慮なく擦っていた。

「あ、ああ……」

「全部入ったか。どうだい相棒、蘭花ちゃんのケツアナの感想は？」

「いいぜえ、ぎゅつと締まって、熱くて、ヌルヌルで……」

身体の中まで汚されたショックに、目を白黒させる蘭花に、下品な会話を交わしつつ、



もう一人の悪党が迫る。

「い、嫌……来ないで……」

「こんだけ待ち焦がれてるくせに、それはないだろう？」

目尻を下げたいやらしい笑みを浮かべつつ、長い舌でペロリと唇を舐め回すと、イエロ
ーマッスルは蘭花の引き締まったウエストを両腕で掴む。

ピチュツ！

先走り汁を纏い、饅えた匂いを放つ肉槍の突端が、散々続けられた責めで解された、ヒ
クヒクと痙攣しつつ愛液を溢れさせるクレヴァスにあてがわれた。

「ひいつ！　そ、それだけは、それだけはやめてえっ！」

すっきり立ち向かう気力の萎えた蘭花は、ただ泣き叫びながら許しを請うばかり。

勇ましい不死鳥から弱い雛鳥になってしまったような可愛らしい姿が、飢えた野獣の
邪な肉欲をよりいっそう掻き立てる。

「だゝめ、だ、よっ！」

激しく身をくねらせ、抵抗する戦士のナイスボディを、禍々しく隆起した男の下腹部へ
引き寄せた。

ズジイッ！

「ぎひいつ！　あつ、あああつつつ！」

秘唇を溶かしかねないほどの高熱を纏った肉槍が、荒縄で無理やり解された筋割れを貫く。

ズブジュルツ！　ズツ、ズブズブズブツ！

「あひいっ！　ひっ、広がる……広げちゃ……ダメ、やあつ！」

燃え滾る陰肉の松明が突き込まれると、乙女の秘所から身を引き裂かれるかと思うほどの激痛が走り、処女の証が内股を伝って流れていく。

（こんな奴に……どうして、こんな奴に……）

いつか出会うはずの、身も心も捧げられるほど愛せる人のために大切にしてきたものが、音を立てて壊されていく。悲劇的な状況に、蘭花の心はますます凍りついていく。

「やったな、相棒」

「ああ、こっちもいい具合だぜ。締まりも、ヌルヌル具合も……」

絶望に打ちひしがれる彼女をあざ笑い、肩越しにニヤケ顔で呼びかけながら、二人の巨漢は息を合わせて串刺しにした獲物の肉体を上下に揺すり始めた。

ブジュツブジュツグジュツギヂュツ……。

ネブツヌブツググリツゴヂュツ……。

「ひっ、ひいひいっ！　そんなに、そんなに揺らしちゃ、ダメ、あぐうんっ！」

湿り気を帯びた淫音を奏でながら、二つの女穴の中を極太の男根が行き来する。時には

二本同時に突き上げ、またある時はタイミングをずらして交互にと、責め方に変化をつけながら。

「あうっん、おっ、お腹が……お股が……こっ、壊れるうっ！ ひいやあんっ！」

ヴァギナの中を蹂躪するペニスとは下腹部を軽く隆起させるほど太く、鉄をも溶かすかと思うほどの高熱で、胎内を焼き焦がす。

同時に膈壁を擦る亀頭のエラが放つ衝撃が、子宮の中までビリビリと痺れさせてきた。

(こ、こんなの、もう……嫌。なのに、なぜ……)

相手は己が肉欲を満たすためだけに、我が身を汚す許しがたい悪党。

なのに無理やり押しつけられる女の悦びがもたらす心地よさが、徐々に抗う気持ちを覆っていくのに、蘭花はますます混乱していく。

「イエローマッスルついにフェニックス蘭花の処女膜ゲット！ マッスルボーイズに一〇

〇〇ポイント追加だあっ！」

すると、再び観客の前に大スクリーンで晒される恥部と共に、絶望的な結果が突きつけられた。

(逆……転……そんな、もう……勝てない……)

満身創痍の状態で、六〇〇点もの差をつけられてしまった彼女に、もはや反撃の手立てはない。

「さして、勝負もついたようだし、これからキミたち姉妹には、我が社の華として稼いでもらうよ。頑張ってくれたまえ」

愕然となる彼女の耳に、勝ち誇ったような楠木の声が飛び込んできた。

試合への参加を強要してきた時には一言も口にしなかった、敗北した時の条件を一方的に突きつけて。

「いやあつ！ やつ、やめてえーつつ！」

「さあして、さっきの続きをしましょうねえ。真奈美ちゃん」

「今度は、何して遊ぼうかな」

ヘッドホンの向こうから、か弱い妹の悲痛な叫びと野太い男の声が、微かに聞こえてきた。

「……まつ、待って！ 妹には、真奈美には、手を、出さないで」

ついさつきまでの憎まれ口とはまるで正反対の、か細い涙声で蘭花は必死に懇願する。

「……」

プツッ！

しかし無情にも、通信は一方的に切られてしまう。あとにはただ、不安を掻き立てる耳ざわりの雑音が残るのみ。

「真奈……美……」

もはや大切な人を救う術のない絶望感が、美貌の女戦士から闘士の炎を消し去っていく。

「さーて、お喋りはそれぐらいにして」

「そろそろ、この身体でたーっぷり、楽しませてもらうぜ」

翼をもがれた不死鳥に、さらなる地獄が襲いかかる。

粘り気のある野太い声で前後から囁かれると、熱さと恥ずかしさで朱に染まった肉体が、大男たちの屈強な腕で上下左右に、激しく揺らされ始めた。

ニジュギチユグチュビジュツ……。

ブジュツグジュツジュブギジュ……。

「ひいっ！　　そ、そんなきつい……あぁっ！」

ガガッ、ガーツガーツ……。

肉穴に打ち込んだ巨根をスライドさせつつ、二人の筋肉男はコースを滑走していく。

時には高速でカーブを駆け抜け、またある時はゆっくりとスピルしながら小刻みに前後進を繰り返す、と言った具合に走りに変化をつけて。

「ひうつ、おっ、お腹が……お尻が……はうんっ、中で、何か……暴れてるうつ！　　ひいっ！」

走りが変わるたびに、膣内と直腸の中を滑る肉棒がのたうち、女体の奥底をかき回す。

「おお、この締め……たまらないなぁ……」

「さすが、初物は違うぜー」

興奮気味の上擦った声で騒ぎながら、ブラックマッスルとイエローは徐々に両腕の屈伸を早め、蘭花の肉体を激しく揺り動かしていく。

肉穴の中に、ヤケドしそうなほどの熱さを強引に刻みながら。

ビジュブジュグジュグチャ……。

プシュッ！ パプッパプパフウッ！

「やつ、やあつ！ なに、これえ……」

散々肉棒にかき回されてきた肛門が、すっかりこなれて滑りがよくなっていると、ピストン運動の速さはますます増して尻の谷間を抜ける放屁に似た空気音が鳴り始める。

「やあああつ！ きつ、聞かないでえ……こんなの、こんな音……」

耳を塞ぐ事もできず、恥ずかしい音色を聞かされたまま揺り動かされる蘭花の肉体は、刻々と淫欲の花を咲かせていく。

もちろん、開発されていくのは肛門ばかりではない。

グチャグジュグシユズジュ……。

（なっ、なに……これ、こんなの……）

挟じ開けられた乙女の城門がこなれて、中を蠢く肉棒を受け入れやすくなるにつれて、股間の奥底から痛みや熱さと違う感覚が湧き上がってくる。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>